

■これまでの委員会における「学び」に関する意見整理

第1回～8回委員会、委員個別訪問時に挙げられた意見

これまでの議論から「学び」「人材育成」「自然科学、人文科学による知見」「防災・減災」に着目し、意見抽出を行った。

<凡例>

【発言委員名（敬称略）、※】

※について、1～8は発言の回、(個)は9～10月の個別訪問時例)【●●(3)】＝●●委員の第3回委員会での発言

■背景

- ・津波に関する調査結果により震災前から津波発生について調査結果を発表していた研究者がいたが、知識として情報を得たものの受け止め方が異なってきた。【大草(1)】
- ・震災後は研究者、歴史家の方たちも一緒になり、工学や科学の方と歴史家が一緒になって、仙台平野の津波のメカニズムを明らかにしようとしている。【宮原(1)】

■意義

- ・これからへの復興への考え・場所に関わりながら育ちあっていく体験をする流れをつくることで、今回の大震災を乗り越えていく、これからを生き抜く力につながる。【高橋悦(1)】
- ・防災だけでなく地球の一つの営みを知る視点、日常時に理解を深めていくことが重要。人間としてのサバイバル力をつける・自分で判断できる力をつける・メカニズムを知っていることが次につながる。【大草(個)】
- ・歴史的、科学的な知見を読み取り、物事を判断することのできる力、総合的に理解する力が必要【大草(個)】

■必要とされる視点

- ・防災、減災を考える場合には、地域のなかで防災意識を持つ仕組みが必要。【村上(1)】
- ・歴史と生活の人生が未曾有の規模で破壊されたという事も語り継いでいく仕掛けが必要。【阿部(2)】
- ・生活に密着していることが大事。小さい頃から自然に気づいていくということがすごく大きい。【木村(3)】
- ・津波や地震を含めた様々な自然現象や人、文化、文化財も含めてそれを上手に科学的に説明していく場所が必要。東部地域を科学的にも、生業を含めいろんな形で説明することができる。【宮原(3)】
- ・自然とともに仙台も生きていくという観点も、3. 11のありかたに含めてほしい。人の社会だけではなく、自然という観点が必要。【宮原(4)】
- ・被災の跡や復興していくプロセスそのものが学ぶ資源として非常に価値を持つものだと感じる。【大草(6)】
- ・防災減災の意識をどう高めていくか、次世代につたえていくかという、これからの視点が非常に重要【村上(7)】
- ・3. 11以降得られた知見や体験を3. 11時と比較しながら、振り返ることも必要。【阿部(8)】

■取組みの方向性

- ・学校教育と地域社会における防災教育が一体のものとして展開できる機会が必要。そのようなことをコーディネートする能力がある方、プログラムとしてプランニング出来る人を育てることが大事。【阿部(3)】
- ・それぞれの地域や小学校や自主防災組織でいろいろな動きがあるはず。そういう所から上がってくるニーズ、そこでやられた成果を、アーカイブする必要がある。【増田(3)】
- ・地域の個々の状況に応じた、独自の学校防災マニュアルのようなものを、専門家も含めてつくったり、講師派遣を行う、アーカイブを活用するなど、様々な仕組みが必要。【村上(7)】
- ・黒松の植林の歴史や、生物環境の震災前後の変化、沿岸被災地の暮らしなど、中心部での講演会開催と、東部地域の現地視察とをコラボレーションすれば効果的ではないか。【阿部(8)】
- ・被災後実施されていた活動や、生物調査結果、被災前の暮らしの論文等などのアーカイブが必要【増田(8)】
- ・人々が東部地域を訪れるのに「伊達政宗公の400年前からここに何があったか知りたい」ということの一歩大きな理由になるのではないか。それだけ長い歴史が存在している。【増田(8)】
- ・それぞれの分野で調査はされていると思うのだが、どこにアクセスすれば良いかがわからない。見える化が必要。【大草(個)】
- ・戦災と震災を合わせて見せていくことも考えられる。【増田(個)】
- ・荒井地区の拠点については、「見方を与えてくれる」「発見できる視点を与えてくれる」というような出発点の機能があれば良い。ただ現場で眺めているだけでは、気が付けない部分もある。【大草(個)】